

松田 里恵¹⁾
まつだ りえ²⁾七條 光市¹⁾
しちじょう みつし²⁾浦野 芳夫¹⁾
うの よしお³⁾

- 1) 徳島赤十字病院 皮膚科
- 2) 徳島赤十字病院 病理部
- 3) 廣瀬医院

要 旨

77歳女性の腰部に生じた Premalignant Fibroepithelial Tumor (Pinkus) の 1 例を報告した。大きさ25×14mm、褐色、弾性やや軟、広基性で扁平に隆起した腫瘤。組織学的には表皮と連続した好塩基性の基底細胞様細胞が細く索状に伸び、互いに吻合して網目状構造を呈し、間質には結合組織成分の増殖を認めた。本症は1953年 Pinkus により初めて報告された基底細胞上皮腫の特異型で、自験例を含め本邦では37例の報告があるのみで、比較的にまれな疾患である。

キーワード：Premalignant Fibroepithelial Tumor, Pinkus, 腫瘍

症 例

患者：77歳、女性

主訴：腰部の腫瘤

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：高血圧治療中

現病歴：約5年前に腰部の腫瘤に気づいたが自覚症状がなく放置していたところ、徐々に増大してきたため、2005年9月5日に当科を紹介され受診した。

現症：腰部正中に25×14mm 大の褐色～黒色の色調がまだらで、弾性やや軟、広基性の腫瘤を認める。周辺皮膚に異常を認めない。(図1)

病理組織所見：エクリン汗孔腫などの皮膚付属器腫瘍

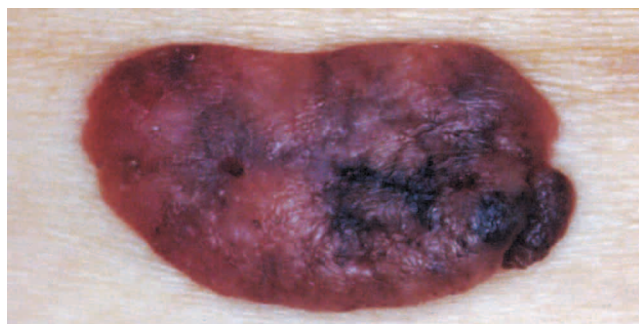


図1
現症：腰部正中の腫瘤

を疑い皮膚生検を行った。表皮より連続して下方へのびる上皮索が増殖し、不規則に吻合し網目状構造を呈し、一部で角質嚢腫を認める。この上皮索を取り囲んで線維性、浮腫性の豊富な間質が増殖している。(図2-a) また上皮索と間質の境界部には裂隙形成のみられる所もあった。腫瘍細胞は好塩基性に染まる大型の核を有し、細胞質に乏しい基底細胞様細胞からなり、上皮索の辺縁では柵状構造を呈する。(図2-b) 以上より premalignant fibroepithelial tumor と診断し、局所麻酔下に3mmのfree marginをとり脂肪層で切除、縫縮した。

腫瘍全体の病理組織所見：広基性の腫瘍で、真皮浅層に境界明瞭な腫瘍塊を形成している。(図3) 切除断端に腫瘍組織を認めない。上皮成分に比べ間質の占める割合が多く認められる。間質はアルシアンブルー染色で濃染し、エラスチカワンギーソン染色で弾性線維は全く認めなかった。

考 察

premalignant fibroepithelial tumor は、1953年 Pinkus¹⁾により初めて報告された基底細胞上皮腫の特異型で、組織発生も同じであるとの考えが一般的である²⁾。本邦では1967年に石川³⁾が最初に報告して以来、我々の調べた限り現在までに自験例も含め37例

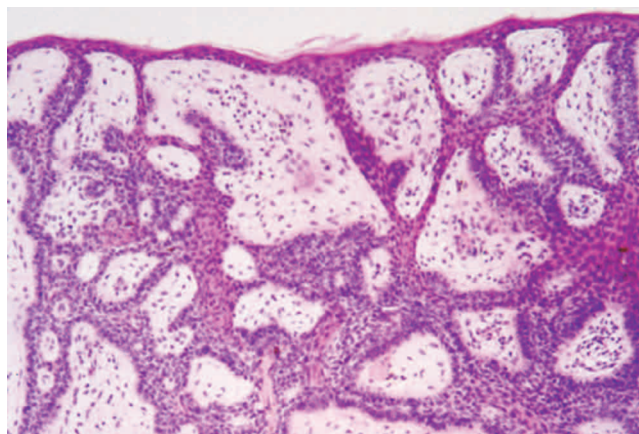


図 2-a

病理組織学的所見：表皮より連続した上皮索が網目状構造を呈し、その周囲に間質の増殖を認める。

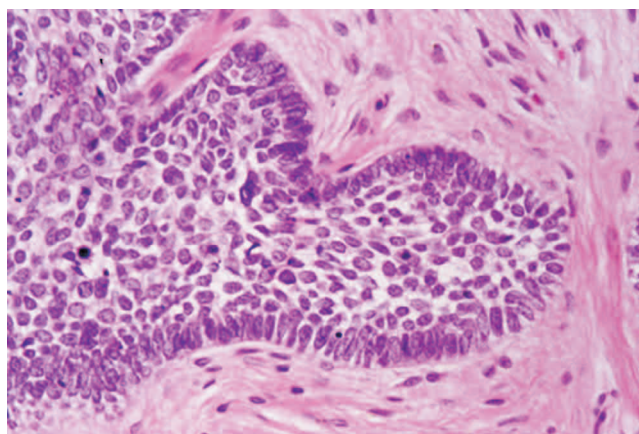


図 2-b

腫瘍細胞は好塩基性に染まる核を有し、細胞質に乏しい基底細胞様細胞からなり、上皮索の辺縁では柵状構造を呈する。

の報告があるのみで比較的まれな疾患である。Pinkusによると本症は臨床的に有茎性で線維腫様外観を呈する腫瘍で腰背部～仙骨部正中に好発するとされる。好発年齢は中高年、性差なく、大きさは5～15mm程度が多い。色調は皮膚色～黒褐色と様々である。発生部位について本邦報告例を検討すると下腹部が8例と最も多く、ついで腰背部7例、外陰部5例、下腿4例である。また恥骨部、鼠径部、大腿が各々3例であった。その他、顔面、頭部、上肢に生じた例もあった。通常の基底細胞上皮腫と異なり下部体幹に好発する理由については現在の所不明である。

病理組織像は非常に特徴的で、表皮と連続した上皮索が下方へ増殖し、不規則に吻合して網目状構造を呈し、この上皮索を取り囲んで線維性あるいは浮腫性の間質が多量に増殖する。この豊富な間質により腫瘍細胞の深部への侵入が阻害されている premalignant の状態を保っていると考えられている。基底細胞上皮腫と本症の間質には性状の差が認められ、本症ではアルシンプルー染色により濃染し、エラスチカワンギンソン染色で弾性線維を欠いている。間質の性状の差が腫瘍の増殖形態になんらかの影響を与えている可能性も考えられている⁴⁾。

本症は上皮系と間質のバランスが不安定であり、上皮成分が間質に比べて優位になると通常の基底細胞上皮腫にみられる組織構築に類似してくると思われる⁵⁾。本邦報告例中10例に同一組織内に充実型の基底細胞上皮腫の組織が混在していた。自験例でも一部で腫瘍細胞の充実性の増殖を認めた。

鑑別診断としては本症と同様の fibroepithelial な増

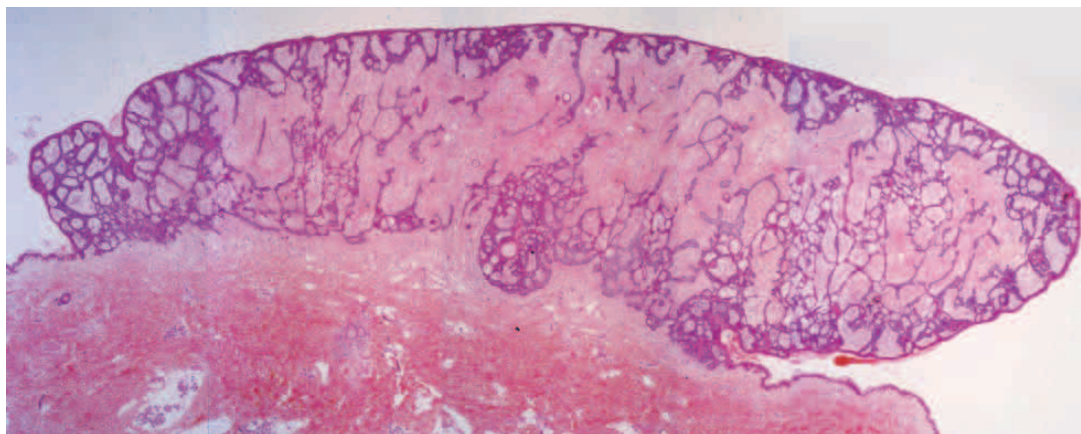


図 3

腫瘍全体の組織所見：広基性の腫瘍で、真皮浅層に境界明瞭な腫瘍塊を形成。上皮系に比べ間質が優位に増殖。

殖を示す eccrine syringofibroadenoma が挙げられる。eccrine syringofibroadenoma の索状部の細胞は本症と異なりグリコーゲンを含む小型で均一な立方形細胞からなり、腫瘍索内の管腔形成と間質における線維血管成分の増殖により鑑別される。

ま と め

典型的な premalignant fibroepithelial tumor の 1 例を経験した。本症は基底細胞上皮腫の 1 型であるが、臨床的、組織学的に通常の基底細胞上皮腫と異なりきわめて特徴的な所見を呈する。

文 献

1) Pinkus H: Premalignant fibroepithelial tumor

of skin. A. M. A. arch. dermatol. Syphilol 67: 598~615, 1953

2) 田沢敏男, 清水直也, 高橋美千代, 他: 放射線照射部位に生じた solid basai cell epithelioma と premalignant fibroepithelial tumor. Skin Cancer 2: 129~132, 1987

3) 石川謹也: Premalignant Fibroepithelial Tumors (pinkus) について. 皮膚臨床 9: 913~920, 1967

4) 高橋美千代, 森下美知子, 山口茂光, 他: 放射線障害皮膚に多発した茎左細胞上皮腫と Premalignant Fibroepithelial Tumor. 臨床皮膚科 42: 209~213, 1988

5) 上野賢一, 川崎 了: 線状を呈した外陰部 Pinkus 腫瘍. 皮膚臨床 17: 527~530, 1975

A Case of Premalignant Fibroepithelial Tumor

Rie MATSUDA¹⁾, Kohichi SHICHIJYOU¹⁾, Yoshio URANO¹⁾,
Michiko YAMASHITA²⁾, Yoshiyuki FUJII²⁾, Masahiro HIROSE³⁾

1) Division of Dermatology, Tokushima Red Cross Hospital

2) Division of Pathology, Tokushima Red Cross Hospital

3) Hirose Clinic

A 77-year-old woman with premalignant fibroepithelial tumor of the lower back region is reported in this paper. The tumor was 25×14 mm in size, brown, elastic and slightly soft, showing broad-based flat elevation. Histologically, basophilic cells, resembling basal cells and contiguous to the epidermis, showed a thin restiform arrangement and assumed a meshwork structure through fusing to each other. The stroma showed proliferation of connective tissue. This tumor is a specific form of basal cell epithelioma first reported in 1953 by Pinkus. It is a relatively rare condition, and only 37 cases of this tumor have been reported in Japan to date, including the present case.

Key words: premalignant fibroepithelial tumor, pinkus, tumor

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 11: 82-84, 2006
